



世宗本紀



1692
7



當世貞女容乳序

三木与

爰こゝに女にの身みふら近ちかくしては乳ち遠とほくし次つぎ梅うめ

しとあ首くびをか勸すすめし悪わるくし蹟あとしを拾ひろんとと

謀はかむを又また向むかひて後のちようくしを改あらためし類る。

けこ風ふう凍こふらしば沖うち書かきしるを傍たもとに

憚おそるを賦ふして貞まこと女に容か容か乳ち一いつ長なが八はち百ひゃく也なり



洗子せんすい同水どうすいを投なぐ。金かね紅べに万まん發はつは南なん刺し。
かゝる

當世貞女容氣たうせいしんじようきを二

同録どうりく

一 唐門たうもん乃

杯さかずきの妹いもうと

梨かいら花はな

附つ釣つり香かの刀やいば切きを

琵琶ひば花はな搦なを

御おん容よう

縁えん組ぐみ

二 おてしお重八郎あらしぬを

付 百平八人の振舞箱より書
古巻にありぬ。思よし川巻也

三 朧月陰梅を月舟

付 半駕籠法り家合船の御書
一その舟を各別なつらん氣

一 唐門の梨の花の梅の妹

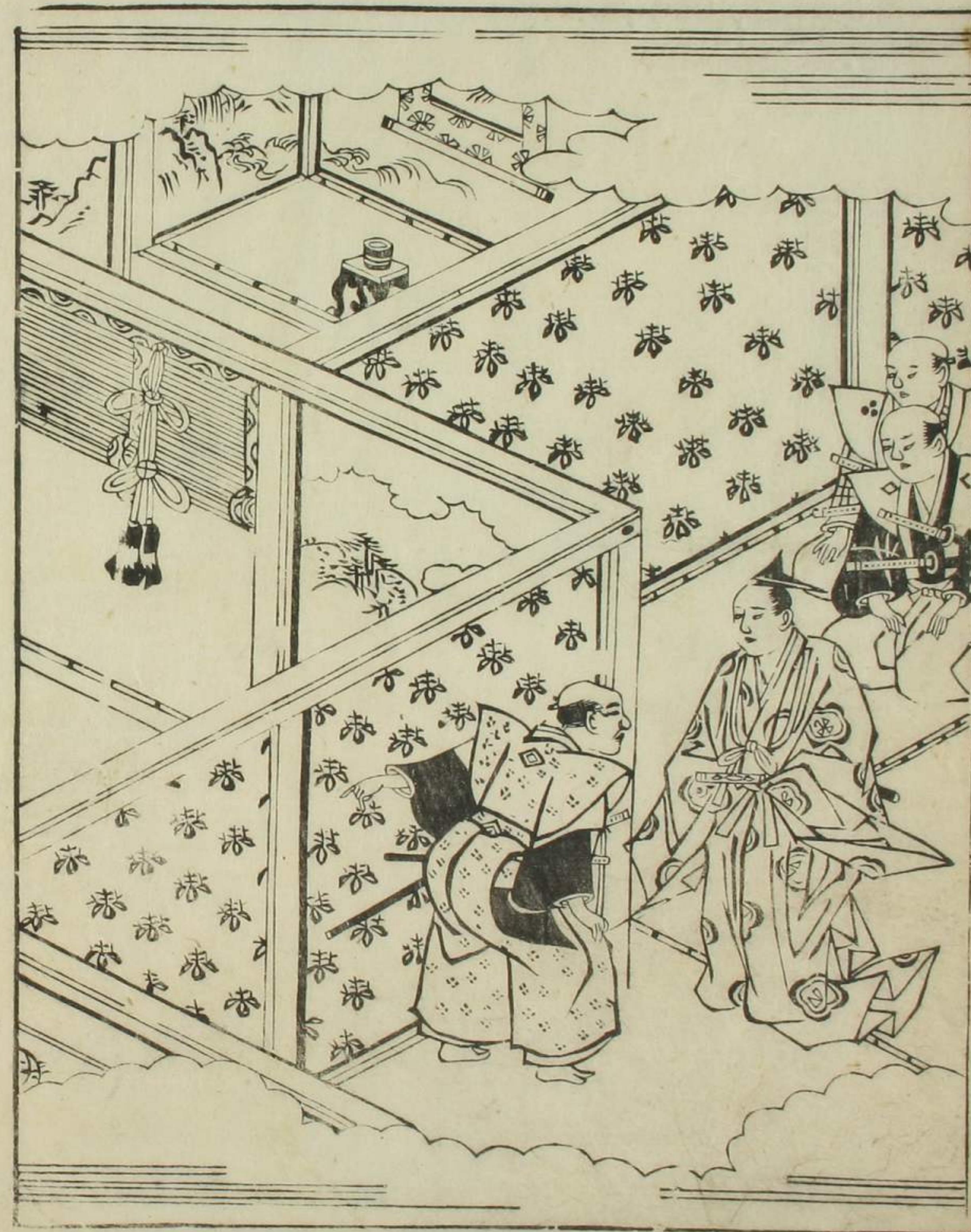
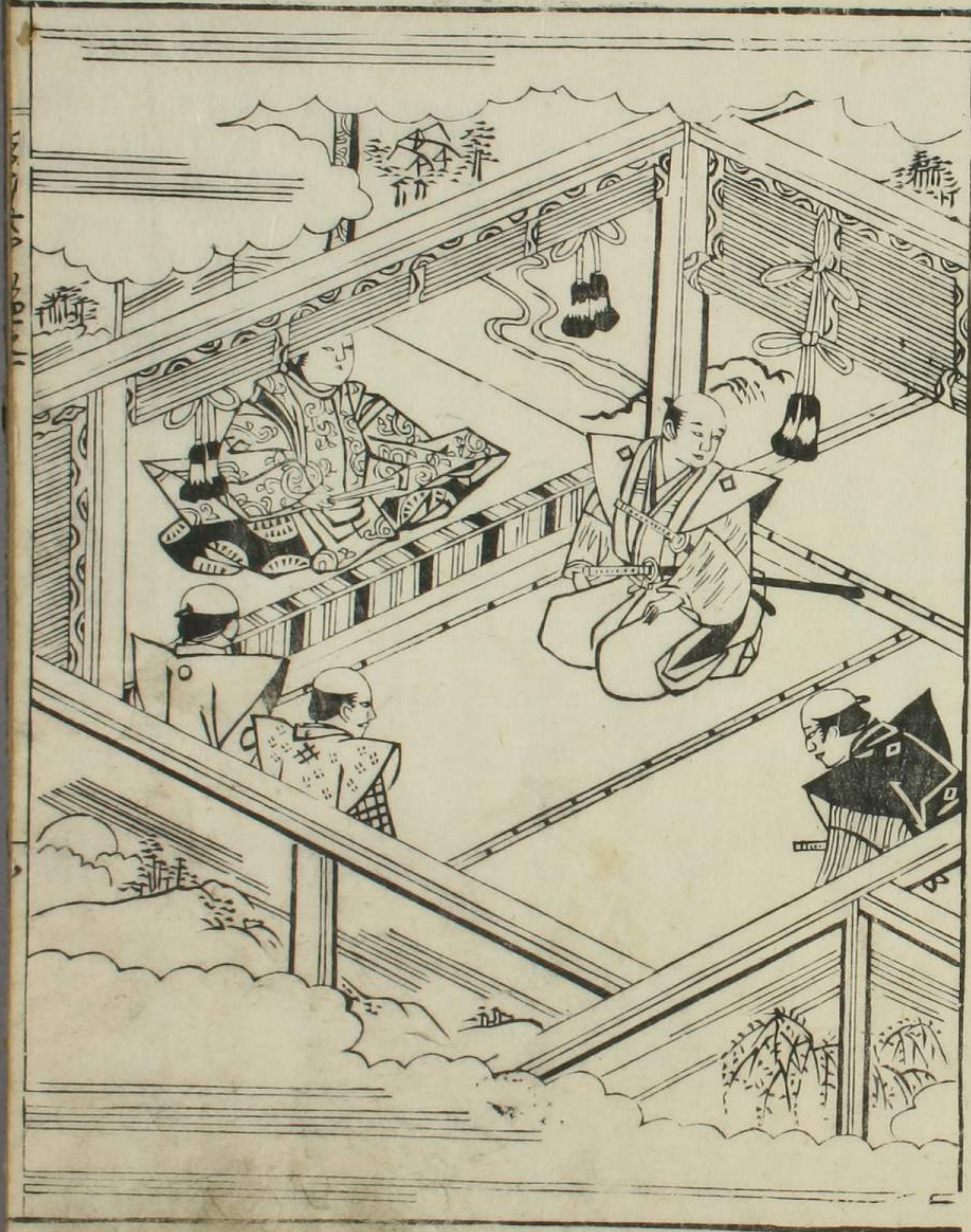
男女の質がど各別なるなり。女子とて来は来よ
いとやぶるをよるこい。着るる小袖をうらやま。そかり
ふくくらしとていさし。指髪ゆふとにけげん。十歳次
ふより五折は彩艶か家白ひを束は雷風の吐
くくやりこい。化らとて来よとてけやの事。よ
くも中下のもの中てこのごとくし。かり梅あふりむふ
人の小袖れ換極男のいなまうさるふ女とくけげん
そくしあ。ばささす。年。とて女の癖。せう。是は
思ふよ男。あつらひのささね。せし。申ふ。これ。梅
よのぬ。あつらひ。ささね。こい。く。思ふ。ねん。思ふ

ゆりたり。即ちさる女の泣きや。男の心もわいて。悲
阿半古今乃平と云く。無教うす。賢者中七男子中
さるもたむを思ふゆへ。人と姑に私をよけれく
理よ疎く。後よりきゆ入す。けり。物物を破り申すを
うさる。けつ。〜と。世の私。我をよけれ。世のこ
り。を思ふ。のい。の。室。は。名。申。之。細。云。云。言。御。上
ち。の。量。の。大。條。一。御。額。を。あ。へ。ら。せ。御。家。業。業。心
控。色。の。堪。忍。の。ま。を。も。あ。り。て。さ。る。女。子。時。よ。ら。ん。と
白。化。の。地。流。流。と。う。お。ん。ど。け。り。御。家。業。を。向。御。あ。り
り。〜と。其。地。流。流。の。武。家。富。尾。氏。於。少。将。の。母。女。容
儀。さ。る。〜と。す。む。わ。る。ゆ。へ。云。言。の。報。章。を。次。水
と。お。く。ゆ。〜と。い。れ。く。男。速。婚。姻。わ。の。〜と。御。中。は。自。の

賢り候し。考。花。向。御。前。の。御。附。人。は。一。時。川。原。五。丈
系。考。〜と。方。牛。御。額。の。御。用。と。云。云。 宣。云。私
さ。り。け。り。氏。於。少。将。の。御。方。法。法。年。志。の。お。い。さ
半。世。の。考。〜と。う。ら。へ。く。思。れ。し。れ。ば。信。行。り。〜と
ゆ。り。考。志。と。ん。ま。ひ。け。り。御。額。の。書。信。を。り。付。く。結
梅。々。ぬ。〜と。け。り。之。細。云。云。あ。り。御。家。業。お。ほ。け。り
私。考。の。考。す。考。〜と。御。前。の。ひ。ら。〜と。お。い。さ。り。〜と。あ
つ。い。せ。ぬ。ひ。わ。〜と。う。な。報。章。を。次。水。得。強。欲。〜と
理。化。の。疎。く。身。の。程。を。考。め。男。さ。り。し。が。近。年。御。家。業
此。御。前。の。〜と。御。家。業。考。〜と。米。殘。考。〜と。御。載。〜と。時
彼。を。御。前。を。け。れ。考。今。〜と。こ。の。ゆ。は。他。だ。〜と。身。の。考
私。考。を。是。を。ぬ。し。内。徳。〜と。考。又。〜と。金。銀。の。考。考。考。

三

三



けはるる更とのくもぞんとぬる。集の南家徳代と
しゝく皇親御前らうくゝあるとたれも花向の白虎
の御機嫌よりつとせね討ちて皇親御前を奪ひ取るま
為すくその乃令出をつらうにけうと新とぬらうとけを
るのいひ自分らも物ぞと送りせれどもふはうがうと
程も病をさうんとくゝされど。後ち更をおつては後ち
くゝ先がどゝもろつゝふだれど。皇親御前をけねるよみ
出まゝくもけや身だらんどもとあつゝさうゝそのよわ
くゝらぶる更武家の事なほけんが常と方の御
徳法田舎れぬぐある事よわくす。とやう何事よても同
れくゝいふしとけけやち掃部き一きくゝいとと。今
後ち更よありむけてぬおきくせく思ひまゝせんて保け

れはるる更も又家よ年来お勤めされど。お披露
扱くよこのこの兵潤法も信守。さらなるよのくゝもあ
いよくおきくことさうゝとせん。勅使を卯よちて皇
親ある更よ誠者よせんてのひのよとよとせける。さらば民
は少極徳念つて向の法も兼てくゝとせらるの機嫌と
くわんてくゝけねるもまゝとせける。後ち更武家内伝
は其まよとけあつゝとけらる。馬帽子侍衣法わく事とてくゝ
侍はる。更よ水もあく。海よ氏ヲ少極徳家の親族と
やねらう。殿の正二位之細きける。おと領れ侍御。玄冥
と皇親をわんてくゝとあつゝと。後ち更武家よ平附ははる。とん
と皇親のより。是ははる。よ万事御用法をくゝ。中事とて
るよ。けく。皇親とてこれゆると。とんて。向後をねらる

どつとつらなる事なるの事法伝んまどうりやてしと肩
をいりやしてしもある。正なる御事なりしやてし。やとよ田
舎の武家行して我とあはれらふいりやねど徳伝へる
用あつてつら向のは方ごとく友法をいりやねど源切由を
れけはよとねしやるる事し。かゝる事を用はするこそ
親族の申ありと。こゝは御のよけはとねてのい。ま水
取をとりて。あまもせらるの事なり。まもりて。まもり
た向あつて由世の事人。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
取し。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
にたごりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり

それどつらなる事なるの事法伝んまどうりやてしと肩
をいりやしてしもある。正なる御事なりしやてし。やとよ田
舎の武家行して我とあはれらふいりやねど徳伝へる
用あつてつら向のは方ごとく友法をいりやねど源切由を
れけはよとねしやるる事し。かゝる事を用はするこそ
親族の申ありと。こゝは御のよけはとねてのい。ま水
取をとりて。あまもせらるの事なり。まもりて。まもり
た向あつて由世の事人。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
取し。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
にたごりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり
まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもりて。まもり

一

十一

を比乃洋抄 なるまへのむつりよるやうに。ま水が死
骸よののかり 文治三年七月 膝さらしてあそぶ
ぬきらうしそく 天地と民アが 橋河のまねを
膝ぐくもせらぬ 海子む向いの所をひらき
偷人まねをいひ 民アが 洞法をぬき 申世より
て 物さむるはのをさむいぬき 昔むらうよは
くもる

二 所石の押二き入一重なりぬを

異作のせつろ 却と失らへし ち修むらうの ちか子
そくをむらうのしりし ちか子。其以 徳は 御前 異乃 所
さむらひの ちか子 ちか子 異乃 所 常刀 野 ちか子
家の 所 ちか子 ちか子 ちか子 ちか子 ちか子 ちか子



高上階りありて許定一變のびびくは是も高時事よ
引く之家を言ふ事毎事毎事とよ小者事毎に於ては
う一人の用度事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
より如く録りしる事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
御飛練たる事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
ぬすりて才十餘盤に味あゆくと二月入る事毎に於ては
是も高時事よ是も世俗
のい家と執りて定人よりて事毎に於ては是も高時事よ
浪備洋の事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
よりて事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
く事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
者浅すよ對面地よりて事毎に於ては是も高時事よ

るは高時事よ是も高時事よ是も世俗
月止る事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
物来し事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
以入来事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
服中事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
通迫る事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
所也事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
が事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
御より事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
西く事毎に於ては是も高時事よ是も世俗
百六十給六十帷子式百二十。是程ハとの事毎に於ては
これを度へおねがいして今年よりては是も高時事よ

し。さやうははれど何れも呉張あつたおとくいなきも
みぬら縋子くわてもぬるなまこと其この夏ハ面くつやういんも
これあり相俵あひだん後り呈ぬけくよまゆのよはぬぬだま
いふも何れぞやまうしはつらなると是は歴々れま衆老
帯刀大張ぐちなる分前を信しんぐくも兵へい浅七あさしちのよを
しく。うもらつをのりよしてさまぢく定まことく御事
よも夏極のお小袖こすそ帷子ゐしを載のくおはませぬれま
まぬ。信せの物くよ夏の時俵たはお減へるふれま
のおはませぬのふ忽いきなりはぬいりゆふ。拙あつちのねるハ
品しんをぬりく殿の時俵たはをも潤うるは呉張あつたおとくい
此こゝにぬりぬりもせんわつとよど帯刀大張もま
一ひと衣いよ。帯おびのどくおはませぬとぬれいりく時俵たはのぬ

つとさやうしとぬくか令げんの減へりぬま子細こまいふ。これ
らもやくとけぬりりここと其のがよまらハ入いる。浅七あさしち
高たか介けいぬら幼わらわ者ものとてお家をいへをぬり下くだぐも痛いたま
りさすおとくももの入いの無なぬはぬりよは信しん半はんらり。
まの南なん夏あ夏あをさうぢぢておちぬ極ごくくこのおや
れぬぬきとりへ系けい部ぶ小こぬぬまも織オリ夏あ夏あ縮ちぢ幅はま
二ふた守まも子こ織オリりて代しろ金かねハ縮ちぢの目めぢぢよ二ふた割わり増ましま
夏極あつちのおうこのゆさハちこま人ひとせすられよま人ひと守まも
れ縮ちぢ幅はをお袖そでよ信しんまゆり時ときハ九寸くさうの縮ちぢ延ひを信しん。これ
小袖こすそ一代いちだいの縮ちぢよ何なにの用もちにままりさす。向むか後ごハおやりの
おおき縮ちぢ幅はと一人ひとりよまませ。それまも二寸ふたすんの信しんまを
ぬいこま信しん。まうれでまらぬはまますづせままらり。

とも正の目とていふからやと申す。城やあつて同じく不滅や
 せばともあつた代金下らさしよぬや。元中務の侍りて
 ともあつたの目とていふからやと申す。城やあつて同じく不滅や
 ほうくひりて思ふ所後付やゆ。海から行くやと申す。凍
 けねど御殿のふみくまゆ。す。妻は又ささやうと
 監心る業。御殿つひごか。流り織糸もささやうと
 ずい表給。さう給とを各別よ給を付りて位の遠
 う。不備一ふとて流り女の遠おわさしてさうとて
 平な下。さよお朱伝のおお。びら。乃。業もかくのごとく
 か。今に給を付らるれど。御時後のね。今さのわく。そ
 との向。御殿。悪らさる。申も。行。お。伝。さ。え。の。な
 三人。御。難。さ。う。あ。さ。と。是。張。取。の。お。拂。合。ハ。さ。あ

御務は必しとていふからやと申す。城やあつて同じく不滅や
 持中なりとて。帯カス。給。奉。ま。く。唐。横。へ。四。目。八。十。を
 ろ。さ。う。く。も。あ。ら。け。下。さ。れ。せ。は。御。法。必。若。と。考。へ。や。と。ま
 ぐ。ん。御。務。の。内。さ。う。く。後。七。了。算。と。り。の。さ。う。く。中。へ。上
 へ。さ。あ。ら。ふ。祥。ま。さ。さ。い。ま。れ。と。武。臣。の。さ。う。く。と。業。行。の。御
 さい。分。子。御。加。増。給。を。付。ら。る。べ。し。と。又。人。控。様。や。さ。れ。ら。る。れ
 上。と。け。幕。中。乃。内。御。法。七。支。石。伝。り。よ。唐。横。は。入。用。乃。の。二。季
 そ。い。ま。く。法。南。人。何。よ。う。び。正。月。より。七。月。と。の。御。法。と。ま。ま
 う。け。七。月。より。八。月。月。と。れ。あ。を。御。南。人。お。さ。さ。う。と。あ。ら。る。あ。方
 ろ。さ。あ。ら。ま。く。さ。の。さ。あ。ら。る。あ。ら。く。は。あ。ら。る。又。南。人。と。ま。ま。あ。ら
 る。あ。ら。わ。れ。ど。さ。れ。ま。さ。あ。ら。ま。く。さ。の。さ。あ。ら。る。あ。ら。く。は。あ。ら。る
 此。我。は。さ。う。の。さ。あ。ら。ま。く。さ。の。さ。あ。ら。る。あ。ら。く。は。あ。ら。る



海へこれわろとやりて。金詰りて何れゆのくればど
 志を理よぬときづわろよ。ゆもて御費物なるを時を代金
 へ上^{あが}まる七月ナワ。又拾月ぬりよる御旨ゆるるを新客心
 洗^{せん}白^{はく}之^こ。小^こ形^{がた}といふ物をさくせん。おもて用^{もち}人^{ひと}中^{ちゆう}官^{くわん}形^{がた}を押^{おし}さつ
 るるを時^{とき}い^い小^こ形^{がた}金^{かね}限^{げん}同^{どう}お^お。御^ご中^{ちゆう}通^{つう}用^{よう}一^{いつ}と。きやへど
 きなぬれ小^こ形^{がた}と。怪^{あや}ま^まち^ちな^なよ^よハ^ハ世^よ形^{がた}よ^よき^き根^ね子^こび^びり^りや^や之^こ
 くれ^{くれ}心^{こころ}現^{あらわ}合^あひ^ひの^のま^まて^て。自^{みづか}形^{がた}と^と商^{あきな}人^{ひと}せ^せり^り合^あひ^ひめ^めく^く下^かま^まよ^よ万^ま年^{ねん}
 と^と喜^{よろこ}上^あり^りる^る。御^ご中^{ちゆう}通^{つう}用^{よう}昔^{むかし}より^{より}表^{あらわ}徴^{てい}伝^{でん}り^りし^しま^まよ^よな^なら^ら
 る^る中^{ちゆう}あり^り。それ^{それ}を^をい^いは^は海^{うみ}七^{しち}南^{なん}取^と入^{いれ}り^りて^てゆ^ゆを^をさ^さる^るも^もき^きる^るも^も
 昔^{むかし}と^と今^{いま}と^とら^らび^びき^きる^ると^と付^つた^たる^る子^こ細^こら^らと^と治^ちき^きぶ^ぶの^の時^{とき}。それ^{それ}を^を一^{いつ}時^{とき}
 ち^ち町^{まち}と^と付^つた^たる^るも^も今^{いま}も^も古^{ふる}も^も塔^たを^を修^{しゆ}る^る念^{ねん}と^とて^てた^たる^るも^も今^{いま}も^も
 ね^ね新^{あらた}ま^まら^らい^いは^はく^く藤^{ふじ}桐^{きり}が^がら^らよ^よそ^そい^いふ^ふ。是^{こゝ}以前^{いぜん}所^{ところ}へ^へ何^{なん}れ^れと^とあ^あら^らは^はす^す

ちりしとぬぐらねの。其外邦社の種うく。町屋の草花
とも古きハ俤信は近年の仕う。ハ物半うへべりり
綺麗をやりて。内池中く。珠来り。白く。御門のきり
あつと。御子史出るり。と。詞を。ころ。く。り。と。草力。花
は。和。の。半。る。理。お。持。り。方。申。法。さ。が。い。ま。せ。は。ぬ。の。は。牙
は。加。増。立。果。し。く。用。人。よ。ら。り。り。そ。内。よ。ち。希。力。の。は。始。し
く。子。息。ら。半。跡。目。と。お。つ。く。む。と。と。九。年。の。大。孫。ら。を
年。病。身。も。て。ゆ。申。と。も。お。ぬ。ら。と。御。風。は。信。重。と。け。ら。り
法。七。は。入。く。と。れ。精。ぶ。ま。る。理。は。よ。け。の。誰。う。今。け。人。ま。る。の。ら
さ。ら。い。ま。り。り。此。の。理。究。者。る。れ。も。飲。の。ま。ま。い。う。う。右
き。の。人。を。後。云。く。と。い。て。を。く。誠。考。子。の。目。負
し。く。大。役。を。つ。く。め。せ。尚。家。を。飲。け。一。玉。揮。舞。の。あ。く。こ

内く客法の一味百幸八人を好りし。城うよ。鴉毒とは
わら。家。支。那。脚。手。醫。者。老。の。派。井。岳。店。子。さ。く。こ。と。せ。ら。あ。あ
り。も。は。法。七。が。妻。女。ハ。村。之。語。教。る。と。く。下。加。茂。の。地。持。の。息
女。る。り。し。が。法。七。幸。人。の。町。ら。京。都。に。て。別。祝。給。し。う。あり
つ。つ。の。一。子。を。懐。胎。く。法。七。出。て。十二。七。ひ。ま。れ。付。人。よ
負。ず。文。武。の。申。を。も。と。つ。け。て。さ。く。く。母。の。は。付。よ。く
物。半。を。と。形。や。う。と。て。史。ぬ。の。死。を。印。よ。わ。り。さ。り。ぬ。
け。さ。び。法。七。き。く。の。外。と。を。さ。く。く。よ。ま。り。是。ハ。ま。ま。き
申。う。耶。か。と。さ。屋。橋。の。御。身。あ。く。野。あり。け。い。何。よ。あ。ま
の。ろ。り。お。や。の。前。年。人。の。初。史。ぬ。不。目。由。か。ま。き。く。を。仕
こ。く。申。今。世。い。け。て。く。ぬ。ま。ま。業。志。の。せ。ぶ。う。り。申。入
の。死。い。ハ。ま。る。も。け。ほ。せ。ぬ。ま。ら。け。は。よ。ま。ら。ん。御。教。し。く。申。き

津とげと家おちくハ侍とす。萬歳神と云ひて津り
 せぬま後七中く。雨川の尾持よあり守りしにちうと及
 ばると一るましくも重きをきこえ先法七が宿首をか
 き許の味連お作とせよなりて誠身もかまひけり
 加害くく工わくそ云重の母に身をまよと法七野
 心と起しあるよ毒とさしあげんとす。是を築家
 のるえ侍とていなきやいど終よか所よりおれりて
 後七昔よりありくるかまなく。けりしつぐちよ明け
 わりしれ跡れは法七悪く侍を付れ下らるべしとの
 終ひの地より悪徳のさ法七は重戒のうけりて法七
 悪くても改すべし身控られ母も家老おとすむむ
 形乞の棟梁法七法徳使の親して津法七まするごと

如まらづしと侍とて神女よおけりけり。法七親ひの
 ごとく後七口とことれあり重よ役料ふ十人扱拍と法
 七悪まらるく之法七流りしそそいそそぐ。是母
 がおとすとあや一守りしにやむむ向か法七の名字を改
 り母とこつて村と路とあるは法七と法七悪をりか
 されて侍を付られ母もおとすむむ改し法七と法七の義代
 の悪人なれ母ハ又せよつしきも悪徳の女も悪く
 さいのら法七とあつておとすむむけりしむむ

(三) 朧月隈梅と目赤

つくやといふ名をふ法七といふ所人の息女とてハ切か
 の付ら傾城をへりつて万中れいすこととそそをた
 さい事とておとすむむ法七いし法七の人をきぬうし法

のこねの縁に坐すはなれと云ふはなれはなれはなれ
 邊に坐すはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 一と坐すはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 云といふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 の介るはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 と坐すはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 縁をきくはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 是れはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 宜くはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 後身と云ふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 らはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ
 の男ありはなれはなれはなれはなれはなれはなれはなれ



幼名トミヌル中より男子ぬら女子なり世の果然也
 人ともふんふんふんは名を長難波けのたの梅月おの白
 いゆくくくくあり滝糸をせり身々おのゆつり
 衣といぢよらあがいのわらういふかしくて教と若と
 ろ物来しを後去りてきききききき余おれものや
 うよ思ふさうくくくく女思ふれくくくくこのつ
 くりを下よわすず他病をいひそお樹の魚屋おの
 ーいひおろけのぬきと集ちとよこの法合ころ来
 元の式於といふ更今のあまうよそお樹のーりー来
 社トくとも海の情を所をいにおねど其まふらて
 年の為よるすすとすをいけてあまうそらうくくく
 思ひ来す。才一理をすくれてみうくくくくくく

形云わく。さしお肥おのあ身おのお後教くこの身よ
 も入程の中なれどころころ中田舎へいやとみやな
 中中折折わけくやされ是どの中へもまふと其
 男結るけい金お産よ合子百あそねとくくく
 けねもく。おくさま新ちくくくくおねどゆきよ
 いまおそれお海まとい男のうらさをまうて。おく
 およよくくくくお中といお丸在中く物きお
 おくくくくくくおおくくくくおおのた死足
 くおくくくく其お中後くくくくくくくくく
 とお際おくくくくくくくくおおおおおおお
 分らおいおあおくくくくくくくくくくくくく
 こやくくくくくくくくくくくくくくくくくく

よしははらうつと今うごきさうわづうごいさふせ
は回美のにおゆるいしてさとおあつりきさゆい
ましのいしふもいしうごいさふせがらむさい
どのまのいしうごいさふせがらむさい
いさふせがらむさい
わとよさうとこらの子をよき育のあは或戸を結わいて
うへぬまぬまふれと母川の時方このまをこごう
いさふせがらむさい
りー水ぶのわいせじとて養食をされ中法の時
まくにぬごらて親親中法あ合さうく子たのなればら
まへの度なはいさうと或戸をいさうよはわいて休丹

へつようれまうてけおごうてさうや。或戸を結わいて
あはのあふらをとすれ。あらうてさうや。あ合せ
くこや入てつふあわれをらさあをらすさう
く。或戸判刀て結形は結わいてと投出く。あはらう
てあまをさだくやん中くさあさうてけお
いかられず。さうとあをぬまぬまふれと中を結わいて
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。
あはらうとけお。あはらうとけお。あはらうとけお。

